
I'm from you

くるみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I ' m f r o m y o u

【Nコード】

N 8 5 4 1 R

【作者名】

くるみ

【あらすじ】

普通の日々を過ごしていた大学生の主人公の前に、自分とよく似た男が現れる。彼の登場によって主人公の人生は動き出していくが、それは全て彼の計画に基づいていた。彼はいったい誰なのか、目的は、全てがつながっていくシリアスもの。

今日は朝からひっきりなしに引っ越し業者が出たり入ったりしている。大きな段ボールを二ついつぺんに運んでいる彼はどうやら新人の様だ。今日来た三人の業者の中でも一番張り切っている。他の二人は要領よくタンスやら机やらを息を合わせて外に運び出している、それを眺めながら僕は次々と段ボールの外側に、中に何が入っているかをマジックペンで書いた。

作業が一段落したのはお昼頃だった。僕は近くの自動販売機でコーヒーを四本買ってみんなに振る舞った。別に飲みたくはなかったが、僕が買わないと三人も飲みにくいかもしれないと思ったのだ。コーヒーを飲み終えると、いよいよ荷物の移動である。このアパートともお別れだ。新人の彼は待機させていたタクシーの運転手に「このトラックに付いて来て下さい。」

と、タクシーの前のトラックを指して告げ、荷物を積んだトラックの運転席に乗り込んだ。残りの二人もその隣に座り、彼らはそのまま引っ越し先のアパートに出発した。僕もタクシーですぐあとを追いかけた。

異変に気付いたのは、僕にとっては当然のことだった。僕はこの辺りの地理には詳しいし引っ越し先のアパートもわりと近いので、この道を使っているのは遠回りであるとすぐにわかった。それでも僕はその時、あまり気には止めなかった。あの新人があまり道に詳しくはないのだろう、その程度の認識だった。

新しいアパートは二階建てのこじんまりとしたもので、僕の部屋は二階の一番端だ。部屋に入るとまず右手に流し台があり、その奥にはトイレと風呂場へのドアが並んでいる。キッチンと言うべきスペースを進むと隣には七畳の和室だ。このアパートは風呂場がある分、前のアパートよりもはるかに快適になるだろう。そもそも今回の引っ越しの動機は、風呂なしアパートにいい加減嫌気がしたから

なのだ。

荷物の搬入が終わると作業員は足早にトラックに乗り込んで行ってしまった。立ち去る前に息の合った二人は少し無愛想に挨拶をし、新人の彼は僕に近づいて少しだけ微笑んで言った。

「あのルートはコーヒーのお礼です。」

その顔を見ながら僕は彼の顔が誰かに似ているかと、ぼんやりと考えていた。

昼の遠回りが意味を持ったのは夜のニュースを見ている時だった。僕は段ボールの山の中で、今日の作業の疲労を背負いながら缶ビールを開け、TVを見ていた。今日運びこんできたばかりのTVの画面は、まず色気のない女性キャスターを映し、次に見覚えのある交差点を映した。ニュースの内容を要約すると、つまりこういうことだ。信号が赤になり停止した自動車に右後方から暴走したトラックが衝突。その勢いで周りの二台を巻き込み計四台が玉突き事故のような形になった。トラックの運転手と衝突された自動車の後部座席に座っていた男性が死亡、その他重傷者二名を出した。

こんな事故が起きていた。本来ならば通っていたであろうあの交差点で。遠回りしていたから助かったのだ。いや、そんなことはない。仮にあの交差点を通ったとしても事故に巻き込まれたかどうかはわからないではないか。何事も無く通過していた可能性のほうが高い。まあどちらにしてもこうして無事であることに変わりはない。面倒なことに巻き込まれなかっただけ少しは運があるのかもしれない、そう考えを締めくくって僕はまたビールを飲んだ。口の中で弾ける炭酸を感じながら僕は、あの新人の別れの言葉を思い出していた。そうして僕は鏡に映った自分の顔を見て、あああいつはこの顔に似ているのだと思った。

「考え過ぎじゃない？」

ドリンクを両手に持ったまま僕の後ろから里奈が言った。このカラオケに来るのはもう今月で三回目だ。僕たちのデートはほとんどがカラオケに行き着く。それでも僕はカラオケが好きだった。安いし何より人目を気にせずストレスを発散できる。

「34、この部屋だ。」

僕はドアをあけ、彼女を先に中に入れると自分も中に入った。里奈はドリンクを机に置くと、座って早速曲を選び始めた。僕は彼女の隣に座り、釈然としない考えのを振り切ろうと彼女の顔を強引にこちらに向けた。

「どうしたの？急に。」

彼女はそう言いながらも僕の顔を見て笑っている。僕も少し笑って彼女の唇に自分のそれを重ねた。初めて里奈とキスしたのは高校生の時だったが、二人とも慣れていなかったせいでお互いの歯が当たった。そうして二人で笑い合った。今はもうそんなことはない。二人とも相手の柔らかい唇を求めた。どれくらいの間そうしていただろう、顔を離すと僕はもうあの男のことを考えるのはやめた。二人で歌うことに集中し、疲れたらキスをした。二時間経つともうヘトヘトになり、僕らは店を出て僕の新しいアパートに向かった。

アパートに着くと僕はまず階段に座っている男に目を奪われた。その男は名前こそ知らないが、最近ずっと僕の頭の中に住みついていたやつだった。男は僕たちに気付くと薄ら笑いで近づいて来た。

「こんにちは、臼田くん。そちらは田中里奈さんだね。はじめまして：でいいのかな。」

「あのどちら様ですか？」里奈が訪ねる。

「僕は引越し業者だった者ですよ。ねえ？」

彼は僕の方に同意を求める。

「どうして引越し業者の方が私の名前を知っているんですか？」

「名前だけじゃないよ。色々知ってるさ、君の嫌いな食べ物も、お気に入りの体位も、最近臼田くんに対して企んでいることとかも全て。」彼はもう笑ってはいなかった。彼の言葉は里奈の顔を強張らせたが、僕には意味が理解できなかった。

「あの、あなたは誰なんですか？」

僕はやっと口を挟んだ。

「僕は君の味方だ。あの事故を見ただろう。このままだと君はこの女に騙されるぞ。僕の話聞きたくなかったらここに電話してくれ。」

「騙される？」

「ああ、確実に。」

彼は僕に紙切れを渡すとまた微笑み、立ち去った。

「ねえ、なにあいつ。頭おかしいんだよ」里奈は僕の腕にしがみついていた。

「私が裕太を騙すわけじゃ、ねえ」

「ああ、そうだな。頭おかしい奴はたくさんいるからな。」

「そうだよ。」

僕らは階段を上がり急いで部屋に入ると鍵を閉めた。

「私シャワー浴びてくる。」

部屋に入ると彼女は言った。僕は彼女が浴室に入ったのを確認して、さっきの紙切れに書かれた電話番号を他のメモ用紙に書きうつし、そのメモを財布にしまった。そしてもう不要になった紙切れは、わざと机の上に放り出した。

彼女は浴室から出てくると机の上の紙切れを見つけた。

「こんなの、捨てていいよね？」

「ああ。俺はお前を信じてるからな。」

彼女は嬉しそうな顔をして、紙切れを破り捨てた。

その夜僕らは抱き合ったが、僕は少しも至福を感じることはなかった。僕にはあの男が嘘を言っている様には思えなかった。根拠は

ない。直感的に感じたのだ。まるで実の兄が忠告をしてくれている
様な感覚がそこには
あった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8541r/>

I'm from you

2011年10月8日19時51分発行